

良薬は口に苦し

ルカ4:21~30 / 李正雨師

人は聞こえの良い言葉だけを聞きたいようです。それが自分にどんな影響をもたらすかは、推測もできません。私も違っていないと思います。聞きたい言葉が甘いのは、誰にとっても同じです。ところが、私たちが信じて従っている神様の言葉の中にも、聞きやすく甘い言葉もありますが、聞き入れ難い言葉もあります。いや、実は神様の言葉は変わりありませんが、自分が置かれている状況によって、神様の言葉は甘いことも、苦いこともあるというのが正しい表現だと思います。自分の状況によって変わる神様の言葉を、私たちはどのように受け入れなければ良いのでしょうか。福音を福音として受け入れるためには、私たちはどんな姿勢を取らなければならないのでしょうか。私は、今日の福音書がこれを教えていると思います。

今日の福音書は先週の福音書につながっている言葉です。イエス様によって主の恵みの年が告げられ、イエス様はこれが実現したことをおっしゃいました。この言葉はナザレの会堂に集まっていた人々を驚かせました。先週に申し上げましたように、会堂に集まっていた人々は、誰もイエス様のことを預言者やメシアとしては思っていなかったからです。それで彼らは、イエス様の前でこう言います。22節の言葉です。「この人はヨセフの子ではないか。」ヨセフの子という言葉は、どんな意味を持っていたのでしょうか。「お前のことは幼い頃から見てきた。お前がイザヤのように私たちの預言者になれるだろうか」という意味ではなかったのでしょうか。この言葉を聞いたイエス様は、彼らに聞いた言葉、彼らの要求が何だったかを言われます。23節の言葉です。「イエスは言われた。『きっと、あなたがたは、「医者よ、自分自身を治せ」ということわざを引いて、「カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ」と言うにちがいない。』」

この言葉を通して私たちが知ることができるのは、ナザレの会堂に集まった人々がイエスの教えを聞くために集まったものではないということです。彼らはイエス様がカファルナウムで行なったことを聞き、そのことを自分たちにも行ってほしいと会堂に集まりました。彼らが望んだのは、イエス様が行なったこと、つまり奇跡だけでした。カバナムの話は、ルカの福音書には書かれていませんが、マルコ福音書には詳しく書かれています。マルコによる福音書1章と2章には、その話について書かれています。イエス様はカファルナウムで汚れた霊に取りつかれた男とペトロのしゅうとめの熱病、多くの病人たちを癒されました。これだけでなく、旧約聖書で汚れた病氣と定められた重い皮膚病を患っている人を癒され、中風の人も癒されました。このことによって、イエス様のことはカファルナウムだけでなくガリラヤの一带に広がりました。同じガリラヤ地方であったナザレの人々も、このニュースを聞いたでしょう。それで彼らは、イエス様がご自分の故郷に来られると、自分のための奇跡を要求しました。イエス様が会堂で何を讀まれたのか、何を説教なさったのかには、興味がありませんでした。ただ自分たちだけのための奇跡を行ってほしいということ。それがナザレの会堂に集まっていた人々の要求でした。

しかし、この要求はイエス様の聖書朗読と短い説教には合わないものでした。先週、水曜日の分かち合いに参加された方々は、よくご存知だと思いますが、この言葉はイザヤ書61章に書かれている言葉であり、イザヤ書61章の言葉の中心はヨベルの年です。ヨベルの年というものは、7年の安息の年が7回過ぎた後の翌年に来る年として、すべてのことが回復される年です。例えば、借金によって僕や雇い人になった人々、いろいろなことによって自分の土地や家を売った人々、こういう人々が自由になることができ、自分の財産を取り戻すことができる年が、ヨベルの年です。このヨベルの年が定められた理由は、イスラエル人皆が神様の僕であり、兄弟だからです。神様の中で同等な人々であるため、神様はすべてが返却されるヨベルの年を定められ、ご自分の民に守りなさいと命じられました。しかし、皆様、一度考えてみてください。果たしてこのヨベルの年が、イスラエル人の生活で実現したことがあったのでしょうか。隣人の土地を自分のものにした人々、隣人たちを自分の僕にした人々は、ヨベルの年を守ったのでしょうか。そうではないでしょう。

私たちが暮らしているこの世界でも同じでしょう。貧しい人々は続けて貧しく暮らし、お金持ちは続けて豊かに暮らしています。過去には、親の借金も子供たちが返済しなければなりませんでした。富だけが譲られるのではなく、貧困も譲られました。このようなことによって、貧しく生きている人々、貧困な生活によって公平な機会を得られない人々、僕や雇い人として生まれた人々、このような人々に回復があるのだという制度がヨベルの年でした。そしてイエス様はこのヨベルの年、すなわち主の恵みの年を告げられました。一度も成し遂げられなかったヨベルの年がイエス様によって成し遂げられるということです。これは単にユダヤ人に限られているのではありません。ユダヤ人を越えて異邦人にも、このヨベルの年の良い知らせが伝えられ、成し遂げられるのです。イエス様によってすべてのことが回復し、私たちが縛っていることから自由になるのです。しかし、ナザレの会堂に集まっていた人々は、この教えを受け入れませんでした。イエス様の教えを聞いて、イエス様に「大工の息子」と皮肉を言いました。そしてイエス様にカファルナウムで行ったことを求めました。「お前が他の町で行ったことを郷里でも行うことがふさわしいことだ」という態度でした。

するとイエス様は、ご自分が歓迎されていないことを話され、エリヤとエリシャの話をなさいます。この言葉は、今日の福音書25～27節に書かれている言葉です。エリヤはシドン地方のあるやもめだけに遣わされ、彼女だけを世話し、エリシャはシリアの人ナアマンだけを癒したというお話です。ここで、シドンとシリアは、イスラエルではなく異邦の地域です。そしてこのイエス様のこの言葉には、前提とされたことがありました。これは「イスラエルには多くのやもめ、多くの重い皮膚病者がいたが」ということです。イスラエルのために遣わされた預言者たちが、イスラエル人ではなく、異邦人を癒したということがイエスさまのお話でした。つまり、ヨベルの年を告げられ、ヨベルの年の中心となったご自分を受け入れない所では、神様の恵みが実現しないことをおっしゃったのです。主の恵みの年は、イエス様を受け入れる所で実現するのです。

これを聞いた会堂内の人々は、みんなが憤慨しました。彼らはなぜ憤慨したのでしょうか。いくつかの理由があったでしょう。大工の息子に過ぎない人が自分の要求を聞いてくれなかったということ、自分たちを教えようとして聞きたくない話をしたということ、異邦人の話をしたということ、そしてイエス様の言葉に何の反論もできなかったということなどが彼らを憤慨させたのでしょうか。それで彼らは、イエス様を殺そうとします。あまりにも変な反応ですね。追い出すのではなく、殺そうとしたことは、彼らがどれだけイエス様を無視していたかを示していることだと思います。29節の言葉です。「総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。」

私はイエス様の言葉、福音というものは、時によって、状況によって変わると 생각합니다。言葉と福音自体が変わるのではなく、私たちが自分の状況や環境によって言葉と福音を違って受け入れるのです。ナザレの会堂の人々にも、ヨベルの年の言葉は必要でした。すべてを回復し、自由にするヨベルの年の言葉は、誰にでも必要な言葉でした。しかし、奇跡だけを望んでいた彼らに、自分たちの利益だけを求めていた彼らに、ヨベルの年の言葉が簡単に受け入れられることはありませんでした。私たちの福音も同じでしょう。福音はいつも神様の恵みと回復を語っていますが、時と状況によって、福音はこの世の価値、人間の欲などとぶつかります。そしてナザレの人々が激しく憤慨したように、今でも福音は、世の中でこのような反応を生み出します。この世はより福音を無視し、追い出し、憤慨することもあります。福音は無くなりません。圧迫と迫害を受けている人、貧困と悲しみの中にいる人、主の恵みの年が必要な人々に、福音は大きな勇気と希望を与えるのです。

今日の福音書の最後の節には、「イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた」と書かれています。イエス様は、奇跡を望んだ人々の目の前で奇跡を起こされました。ご自分を殺そうとしている人々の間を通り抜けて去られる奇跡。この奇跡がナザレの人々が体験した奇跡でした。神様の言葉はある人には嬉しい奇跡になり、ある人には皮肉なことになります。同じ言葉も受け入れる人によって変わります。良い土地に落ちた神様の言葉は100倍、60倍、30倍の実を結びます。苦い言葉も、良薬として受け入れる人は、この言葉によって良い実が結ばれるのです。神様の言葉が皆様を回復させ、自由にしてくださいませうように。主の恵みの年の祝福が私と皆様の生活に臨みますように、主の御名によって祈ります。アーメン